

Let's Know Hiroshima Castle.

# しろうや！ 広島城



No.61

## 中国軍管区司令部防空作戦室の謎！

今年、広島では浅野氏広島城入城400年記念事業が開催され、広島城が注目を浴びていますが、明治以降、かつての城郭内には大本営や陸軍の司令部、連隊本部等も置かれ、軍都広島の中核をなしていたという歴史もあります。

現在の広島城跡内には、被爆建物でもある中国軍管区司令部防空作戦室をはじめとした軍事遺構も点在します。こうした広島城跡内の歴史を、後世に伝え残す必要があると考えています。

中国軍管区司令部防空作戦室については、以前「しろうや！広島城No.45」で書きましたが、今回はそれ以降の調査で判明した点なども踏まえて、再考察してみたいと思います。



### 中国軍管区司令部防空作戦室とは

昭和20年(1945)、本土決戦が現実味を帯び、米軍の日本本土上陸に備え陸軍の組織そのものが大きく改変されていきます。6月に中国地方の防衛を強化するために、広島城内に中国軍管区司令部と59軍司令部が置かれます。

中国軍管区司令部の重要な任務の1つに、防

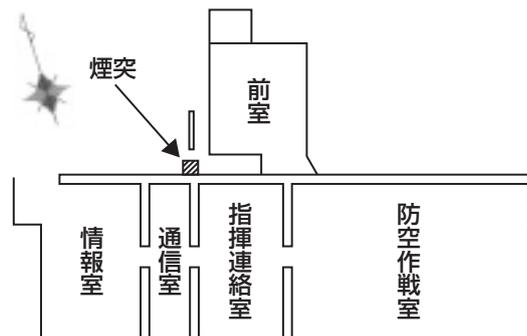
空作戦がありました。中国5県に対して防空警報(空襲警報・警戒警報)を発令する部屋が、中国軍管区司令部防空作戦室です。

中国軍管区司令部防空作戦室は、半地下の構造物で、内部には4つの部屋が存在し、西側から情報室、通信室、指揮連絡室、防空作戦室となっていました。情報室と指揮連絡室には4月

から、比治山高等女学校の3年生が学徒として動員され、肉眼で上空を飛ぶ航空機を監視する各地の防空監視哨の目撃情報を、専用の情報機で受け取る業務をしていました。通信室では、陸軍の通信兵が常駐し、軍直轄の防空監視哨と無線で通信をしていました。その隣の指揮連絡室では、女学生が防空警報の発令・解除を電話で広島中央放送局や軍の各部隊などへ伝達する業務を行っていました。

一番東側で一番広い部屋が、防空作戦室で、中国地方を飛行するすべての航空機の情報が一元的に集められ、この情報を基に、防空警報（空襲警報および警戒警報）の発令と解除を行っていました。

日本には6か所の防空作戦室が存在したことが確認されていますが、現在も残る防空作戦室は広島城跡に残るものが唯一です。



ルーチェサーチ(株)が作成した実測図をもとに作成

## 前室の謎

中国軍管区司令部防空作戦室の北側には、いわゆる前室と呼ばれる付帯する建物があります。この建物には天皇陛下の御真影が保管されていたとか、重要書類を入れる書庫であったとか言われてきました。

現在、この前室の出入り口は閉塞され、一切立ち入ることができず、内部の状況は全くわかりません。

中国軍管区司令部防空作戦室の各部屋の壁には、空調のためのダクトを通したと思われる四角い穴があり、天井にはそれを吊した金具も残されています。そのダクトの経路は指揮連絡室から前室へと繋がっており、前室には空調関係の機械が設置されていたことは間違いないと思われま



前室へと繋がる穴

前室の西面には他の窓とは異なる大きな開口部があり、さらに約50cmの間隔を開け、垂直な壁が立っています。広島工業大学の<sup>おおひがし</sup>准教授は、大きな開口部には空調機の熱交換器が置かれ、熱を外へ逃がし、その前面の垂直の壁は、外側に向けた熱交換器のフィンを守るために設置されたのではないと推測されています。

以前許可を得て、前室の上部の穴（おそらく通信用アンテナのケーブルを通した穴）から小型カメラを降し撮影した際には、床面に機械を据え付けるコンクリートの台のようなものが確認できました。また、床面までの高さを計測したところ、床面はほぼ防空作戦室の床面と同じ高さであることが確認できました。ただ、カメラを垂直にしか下せなかったもので、前室の全容は明らかにできていません。前室の床面には水が溜まっていることも確認できており、建物の保存を考える上でも早期に内部調査を実施し、前室の役割も明らかにするとともに、保存処置を講じる必要があると考えます。



前室内部（床面）

## 煙突の謎

中国軍管区司令部防空作戦室の北側の壁に接する形で、煙突があります。この煙突の用途は換気か排熱のものと思われま

せん。現在は、合板の床面が貼ってあるのですが、床面張替え工事の際、当時の床下まで確認しましたが、やはり煙突につながる穴はありませんでした。単に装飾として煙突を作るとは考えにくく、煙突の役割を考えると、現在の床より下に排気・換気を必要とするなんらかの空間が存在しているのではないかと推測されます。



煙突

中国軍管区司令部防空作戦室は先に述べたように4部屋で構成されていますが、それらを機能させるために必要であろうと考えられる部屋が1つ見当たりません。それは、蓄電室もしくは発電室です。この部屋が無いと、停電により電力の供給が断たれた場合、中国5県に対して防空警報の発令・解除ができなくなってしまいます。そのような事態にならないように、非常用の電源が準備されていたと考えるのが妥当です。現在の床面よりも一層下に、蓄電室もしくは発電室が存在しているとするれば、換気や排気の必要上、煙突がその場所に繋がっていたと推測できます。

蓄電室もしくは発電室の存在は、仮説の域を出ませんが、傍には重量のある慰霊碑も設置されているため地面の陥没などの危険もはらんでおり、周辺や地下を含む早急な調査が望まれます。

す。

## 8月6日8時15分直前の防空警報の謎

8月6日の原爆投下の直前、防空警報（空襲警報や警戒警報）は広島には一切出ていなかったとされていますが、中国軍管区司令部防空作戦室の指揮連絡室で勤務していた学徒の1人、岡ヨシエさんは「〇八一三 ヒロシマ・ヤマダ ケハ」（8時13分 広島と山口に警戒警報発令と言う意味）の紙が、一番奥の防空作戦室から出て、それを自分が担当する電話交換機を使って広島中央放送局などへ伝達しようとした瞬間、開いていた窓から入ってきた原爆の爆風で飛ばされ気を失います。そのため、広島中央放送局にはその情報は伝わっていないと証言されています。<sup>\*1</sup>

しかし、上流川の広島中央放送局にいた古田正信アナウンサーは「午前8時13分、中国軍管区情報、敵大型機3機、西條上空を西進しつつあり、嚴重なる警戒を要す。」の原稿を受けとり、スタジオからその放送原稿を読もうとした瞬間に爆風にあいます。<sup>\*2</sup>

古田アナウンサーの証言では、警報発令の情報は確実に広島中央放送局には届いています。この点は岡さんの証言とは矛盾します。岡さんの証言も正しいとすれば、広島中央放送局には岡さんとは別のルートで情報が伝わったことになります。当時、中国軍管区司令部に勤務されていた落合秀明さんが、防空作戦室勤務の兵長から聞いた証言として、松永監視所（松永防空監視哨）からの通報を受け、あわてて新見中尉と秦少尉が防空作戦室（落合さんは策戦室と記述）に戻り、新見中尉が防空作戦室から放送局に電話し空襲警報発令と叫んだと手記に書いています。<sup>\*3</sup>指揮連絡室で電話交換機を担当していた岡さんは、司令官や参謀達のいる防空作戦室内から、他の司令部などへ電話を繋ぐように指示が出た記憶はないと証言されており、防空作戦室内には、外部と直接連絡できる独立した電話があったと思われます。

さて防空警報に関して、あまり語られていない点があります。この頃のラジオ放送は1日6回の放送休止時間があり、午前8時～午前10時

までは2回目の放送休止時間となっています。実際8月6日も原爆投下時も放送は休止しており、8時15分より少し前に、広島中央放送局の原放送所（現広島市安佐南区）では警報送出の合図が来て、送信機をスタンバイ状態から放送が出せる状態にしたところであったようです。<sup>\*4</sup>

ここで疑問に思うことは、8時から放送を休止しているのであれば、みんなラジオの電源を一旦切っていたはずですが、休止時間帯に再び電源を入れさせるには、警報のサイレン吹鳴が必要です。放送休止時間帯でも、サイレンの音が聞こえれば、情報を得ようとラジオの電源は入るはずですが、もし、古田アナウンサーが無事原稿を読むことができていたとしても、警報を告げるサイレンの吹鳴が先にないと、ラジオは切られたままで、古田アナウンサーの声は誰にも届きません。

当時、中国軍管区司令部防空作戦室の情報室で勤務していた軍属の斎藤美知子さんは、警報が発令され、警報板のスイッチを押しはじめ半分くらい伝達し終わった時に窓から入って来た爆風で飛ばされます。<sup>\*5</sup>この時の警報は、警戒警報・空襲警報の両説あり断定が難しいですが、僅かですが警報の伝達が行われた可能性はあります。

原爆投下直前に、防空警報が中国軍管区司令部防空作戦室から発令され、外部に一部伝わり、その地区のサイレンを吹鳴した可能性はあります。実際に被爆された方々の手記を読むと、原爆投下の直前にサイレンが鳴ったと書かれているものもわずかですが存在します。

しかし、昭和20年8月13日に中国軍管区司令部がまとめた「八.六 広島市被害状況」の中では、8時7分の松永監視哨から、西北進中の

大型機2機を3機に訂正した情報を最後に、その後の警報発令などについては一切記述がありません。このことも謎です。

8月6日8時15分直前の防空警報は、正式な記録もなく、当時を知る関係者の記憶の中だけにあり、これ以上明らかにできない永遠の謎と言えるかも知れません。

平成29年(2017)4月から、中国軍管区司令部防空作戦室は、天井や壁のコンクリートが剥離するなど安全性が確保できないという理由で、内部の公開は中止となっています。しかし、中国軍管区司令部防空作戦室は平和学習に活用され、広島市のピースツーリズムの遺構に策定されている場所でもあります。閉鎖される前には、年間約1万人の方々が平和を学ぶため見学に訪れた場所でもあります。そのためにも、一刻も早い調査と保存措置、そして内部公開の再開を望みます。

(秋政 久裕)

- ※1 広島城 資料解説書『広島城と陸軍 一昭和20年8月6日防空作戦室一』平成27年  
「交換台と共に」岡ヨシエ P14～P17
- ※2 広島市役所『広島原爆被災誌 第1巻 第1編総説』昭和46年 P58
- ※3 落合秀明『ある被爆者の人生』（自費出版）  
平成7年（平成12年3版） P99～P100
- ※4 白井久夫『幻の声 NHK広島8月6日』岩波新書  
平成4年 P111～P112
- ※5 斎藤美知子「原爆体験記」（執筆年 平成7年）  
国立広島原爆死没者追悼平和祈念館（広島城資料解説書『広島城と陸軍 一昭和20年8月6日防空作戦室一』にも掲載）



編集・発行  
公益財団法人広島市文化財団  
広島城

〒730-0011  
広島市中区基町21-1  
電話：082-221-7512  
FAX：082-221-7519

令和元年9月27日発行

広島城利用案内

開館時間：9：00～18：00

（12月～2月は9：00～17：00）

入館の受付は閉館の30分前まで

入館料：大人370円（280円）

中学生以下無料

高校生相当・シニア（65歳以上）180円（100円）

（ ）内は30名以上の団体料金

休館日：12月29日～31日（臨時休館あり）

ホームページ <http://www.rijo-castle.jp>